

ビザンティン画家カリエルギスの画業 —— ヴェリアの救世主キリスト復活聖堂（1314/15年）の壁画装飾プログラム

橋村 直樹（岡山大学）

ギリシア北部の都市ヴェリアに現存する救世主キリスト復活聖堂は、クセノス・プサリダスとその妻エウフロシニによって14世紀初頭に創建された単廊式の小聖堂で、内部に後期ビザンティン画家カリエルギスによる創建当初からのフレスコ壁画を有する。この壁画については、ペレカニディスによるモノグラフをはじめ、これまで多くの研究の中で言及されてきた。しかしながらそれらの先行研究は、中世美術において珍しく名前の残る画家カリエルギスに注目し、主にその様式的側面に触れるものがほとんどで、装飾プログラム全体について、その考案者や聖堂用途まで考慮して分析するものではなかった。

本発表では、救世主キリスト復活聖堂が葬礼用聖堂として創建されたことを明らかにし、装飾プログラムがいかに関係し、創建者の願いを反映しているのかということについて考察する。またその考察過程において、画家カリエルギスが限られた壁面の中で装飾プログラムを巧みに実現していることを示し、さらに「冥府降下」における登場人物が創建者の実際の肖像となっている可能性があることを指摘する。

救世主キリスト復活聖堂が主に葬礼用途を担っていたことは、装飾プログラム全体と聖堂内外の諸イメージや銘文の分析から明らかとなる。南北壁面のブラインドアーチに「磔刑」と「冥府降下」の二場面が配されることによって、キリストの死と復活を経た救済の概念が明示され、さらにアプシスの聖母子と関係して、救済の前提となる受肉の概念が強調されている。また旧約の預言者が新約諸場面と一対一対応で関係づけられることで、旧約の預言が新約において成就したことが示され、さらに未来における救世主の到来である再臨の概念が強調されている。受肉を前提とし、死と復活を経た救済、さらには再臨という神学概念が装飾プログラムにおいて強調されるのは、死者の魂の救済という文脈においてこそ相応しいといえよう。

死後の魂の救済という創建者夫妻の願いは、南壁のブラインドアーチにおける「冥府降下」においてもっとも強く表されている。キリストによって復活させられているアダムとエヴァが、救済を願う創建者夫妻と重ね合わされているとみなされるからである。さらにエヴァは、ビザンティン美術における一般的な「冥府降下」のエヴァのように典型的に描かれず独特の顔貌を呈していることから、創建者エウフロシニの実際の肖像となっている可能性がある。

ヴェリアの救世主キリスト復活聖堂の限られた壁面に展開された一見単純な装飾プログラムは、創建者夫妻の死後の救済の願いを反映し、受肉、救済、さらには再臨という重要な神学概念を明示しているのである。